前回までのあらすじ

流遠（るとお）やみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる。
しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。
少女の名はツバキ・タカチホ。
彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。
ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅（せんめつ）であり、彼女はそのための存在――〈機獣（きじゅう）少女〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅（せんめつ）し、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。
しかし世界は改変され、やみひめと橘（たちばな）アサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥（おとしい）れている別の敵性体――〈プレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。
しかし状況は推移し、〈プレケース〉は姿を潜め、入れ替わるように新たな脅威が現れた。機獣を思わせる特徴を備えた、蠍（さそり）の姿を模したそれは群れを成し、やみひめ達の滞在するオオミヤ・シティを蹂躙した。
蠍の群れが現れたのが、アサト達の出かけていた繁華街と知り、パニック状態となったやみひめ。彼女を気遣う親友のクラウ、そしてロゼットだったが、最後にやみひめを受け止めたのは、やはりアサトだった。

※登場人物紹介はこちら

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

無言で〈L．C．ファクトリー〉の整然とした廊下を進む少女が一人。

すらりと伸びた手足に、メリハリのある体形。おまけに整った容貌もあり、男女問わず、すれ違う者が彼女を振り返る。

クラウ・P・ブラン。

白いメッシュが入った、長い黒髪。鮮やかな真紅の瞳。ただでさえ目を引くパンキッシュな見た目だが、本人は至っておとなしく控えめな性格で――まだ小学生だったりする。

高校生に間違われる事が多いが、間違いなく小学六年生なのだ。

普段は他人に注目されるのも苦手だが、今のクラウはそれどころではなかった。よくよく見なければ気付かないが、ほんのりと頬が赤い。

「うぅっ……」

先ほどの光景が頭から離れない。

ほんの少し前まで、友人の流遠やみひめと談話室にいた。其処に彼女の想い人である少年、橘アサトが来て、状況が一変した。アサトの身を案じて、一時はパニック状態となっていたやみひめだったが、彼の無事を知り、平静を取り戻した。だが、アサト本人を目の前にしたやみひめは、感極まったのか、大粒の涙を流し、咄嗟に駆け寄った彼に抱き締められていた。

その瞬間は、やみひめに対して『よかったね』という気持ちと、アサトに対する嫉妬を少しだけ感じた。あんな風に友人の感情を揺さぶる事は、きっと自分には出来ないから。

しかし、そんな事を感じるのは一瞬で、すぐにクラウの頭の中は二人の抱擁のシーンでいっぱいになった。あの場でどうこうなるとは考えないが、クラウの豊かな知識と想像力が、大きく羽根を広げてしまう。

友人でそんな想像をしてしまう罪悪感と自己嫌悪を覚えつつ、やがてクラウの脳裏に、とある男性の姿が浮かぶ。

（ハン、どうしてるかな……）

神譲ハン。

クラウのクラス担任をしている男性教師。クラウにとっては親戚のお兄さん的存在で、彼女が恋心を抱いている相手でもある。十歳という年齢差もあるが、クラウは性格的に積極的なアプローチなど出来ないし、彼は朴念仁のきらいがあるため、彼女の想いにはまるで気付いていない。

（心配、してくれてるかな……）

転移現象でゼヘナにいる以上、地球では行方不明扱いになっているはずだ。もっとも、時間の流れが二つの星で違うかもしれないし、ひょっとしたら新たな改変が行われて、自

分達は存在しなかった事になっているかもしれない。可能性だけなら無限に考えられる。
ただ明確なのは、自分ではどうにも出来ないという事。帰る手段がない。あったとしても、今はやみひめを手伝って、この惑星ゼヘナの人々を救うと決めた。
だから――

「――汝、たしか地球から来た娘だったな？」

唐突に声をかけられた。周囲を見回して、『汝』というのが自分を指しているのだと判断し、クラウは言葉を発した人物に答えた。
「は、はい……」
見覚えのない相手だ。事務職の女性が着ていそうなスーツ姿なので、この場に溶け込んでいてもおかしくないはずなのだが――圧倒的に浮いている。
恐らく、意識しなければ風景に溶け込んでしまうのだが、その存在に気付いてしまえばもう目が離せない。そんな不思議な雰囲気を纏っている。
前をまっすぐに切り揃えた、長い黒髪。すべてを見通すような紫眼。
年齢はよく判らない。高校生くらいにも見えるし、二十代半ばだと言われれば、そんな気もする。
美醜で問うなら、間違いなく美しい。だが、それも彼女の本質とは関係がない。外見も、年齢も、性別すら、この娘にとっては些末事であるように思える。
やはり――不思議な娘だ。
「ちょうどよい。手伝ってくれ」
しばし、娘はクラウを矯めつ眇つすると、そう言って背を向けて歩き出した。
「え？　でも、私――」
「ロゼットは来客中だ。今、訪ねても邪魔になるだけだろう。終わるまで、我に付き合ってくれ」
こちらを振り向く事なく娘は言うと、クラウの返事も聞かず、先へ進んでいく。気付かなかったが、すぐ目の前がロゼットの執務室で、彼女は恐らく其処から出てきたのだ。
（ロゼットの秘書？　私の事を知ってたけど、どうして……？）
疑問はあったが、娘はどんどん先へ行ってしまう。彼女の言った通りなら、ロゼットは来客中なのだろう。それなら本当に邪魔になってしまう。
クラウは娘の言葉に従う事にした。
まさか不審者でもあるまいし、それならそれで〈機獣少女〉の力を使えばいい。

「用心深いな」

慌てて娘に追いつくと、やはり振り返る事なく彼女は言った。その言葉は、クラウが迷った事を指しているのか、それとも、左手に付けた待機状態（モード）のＭＢデバイス〈ラインハイト〉に意識が向いているのに気付いての事か。

「慎重である事は美徳だ。臆病者の方が長生き出来る」

馬鹿にされているとは感じなかった。年老いた老兵のような説得力があったからだが、彼女はそんな年齢ではない――少なくとも、見た目の上ではだが。

「地球に帰りたいか？」

「……え？」

一瞬、何を言われたのか判らなかった。

「帰って――逢（あ）いたい者がおるのだろう？」

「……」

足を止め、振り返ってこちらを見つめる紫色の瞳。

魅了されたかのように、クラウはその視線から目を逸（そ）らせなかった。

第二十九話

『ヲワリノハジマリ』

〈L．C．ファクトリー〉内にある執務室。其処は主の性格を反映してか、必要充分な機能こそあれ、大手企業の最高責任者の部屋としては簡素なものだった。

「ふ〜む……なるほどね」

あまり使う機会のない壁掛けの六十インチ・モニターに流れる映像を観て、部屋の主であるロゼット・コダールはそんな感想を漏らした。

長い金髪と、澄んだ青い瞳。技術者という職業柄か、最低限のメイクしかしていないが、むしろそれが彼女の地の美しさを引き立てていた。女子大生のような容姿でありながら三十二歳というのも驚きだが、それでも大手企業のトップとしては若すぎるだろう。

「率直に、どう思った？　戦ってみての感想でもいいよ」

ロゼットは映像を戻し、機械に見える蠍が映るシーンで一時停止させ、室内にいた少女達に問うた。

「機械のように見えますが、動きは生物そのものでした」

年上の少女を一瞥し、発言する様子がないのを確認したツバキ・タカチホが言った。

左側でサイドポニーにしたセミロングの黒髪。穏やかな色を湛えた、蒼玉を思わせる青い瞳。年齢相応の可愛らしい容姿だが、その落ち着いた雰囲気と冷静な口調は、小学五年生のものとは思えない。

「素人考えですが、かつて存在した機獣というのは、こういうものだったのではないかと感じました」

「同感ね。戦ってみて、意思のようなものを感じたわ」

ツバキの意見を補足する形で同意したのは、年上の少女――カナコ・T・シングウジだった。

サイドを切り揃えた長い黒髪。静謐な色を湛えた、黒瑪瑙を思わせる黒い瞳。ツバキより六つ年上の高校二年生で、〈機獣少女〉としては先輩に当たる。

とはいえ今のやり取りは、面倒だから後輩に説明させたというより、ツバキの方が上手く説明してくれるという信頼に依るものだろう。それを言葉にせずとも互いに理解し合える。そんな関係を築けている二人の少女を、ロゼットは微笑ましく感じた。

「……なにニヤニヤしてるのよ、気持ち悪いわね」

「えー、それはちょっと傷付くなぁ……」

本心ではないにしろ、カナコのような美人に真顔でそう言われると、多少はショックだ。苦笑を浮かべつつ、ロゼットはツバキに水を向ける。

「ツバキー。私、そんな顔してた？」

「いえ。むしろ、我が子を見守る母親のような慈愛に満ちていました」

一切の悪意なく、むしろ百パーセント善意からの発言に、ロゼットは苦笑のまま現実に打ちひしがれていた。特に年齢を気にしている訳ではないが、やはり彼女等のような少女と同じ目線に自分はもう立てないのだと、思い知らされたというか。

きっかけは地球からの来訪者――特にクラウの存在が大きい。

放っておけないというか、つい気にかけてしまうというか、これまでは意識する事がありなかった、母性を刺激される。出会ってまだ一日しか経っていないというのに。

「カナコさん、私、何か失礼な事を言ってしまったでしょうか……？」

『『母親』って単語に神経質な年頃なんじゃない？」

無垢な少女達――一人は微妙だが――の声を潜めた会話は聞こえなかったふりをする。

ロゼットは大人だから。

「話を戻すけど――私もこの蠍モドキを見てると、機獣なんじゃないかって感じる」

機獣。

それは、かつてこの惑星ゼヘナに存在した金属生命体の総称である。正確には、兵器として機械化されたものを指すのだが、本来の機獣が存在しない今となっては些末な事だ。

「ですが、すべての機獣はコアを抜かれ、機体は廃棄された……と、学校で習いましたが」

そう。ツバキの言った通り、現在のゼヘナに機体を持った機獣は存在しない。封印施設で眠っているはずの機獣を除けばだが。

「――うん？」

不意に、ロゼットの座る執務机に置かれた電話機が、呼び出しを告げる電子音を鳴らした。内線である事を確認し、受話器を取ると、それはエントランスの受付嬢からだった。

「アイナとルイゼが帰ってきたそうだよ」

受話器を置き、ロゼットは開口一番にそう言った。

「……帰ってきた？」

カナコが眉を顰める。

当然だろう。封印施設の様子を確認し、報告するために向かった彼女等が、一度の報告もなく帰還するのはおかしい。長距離通信機を用意し、場合によっては監視のため、しばらく駐留する事になっていたのだ。

更に――

「あの、お二人だけですか……？」

ツバキの疑問ももっともだ。件の二人は同行者で、封印施設に向かったメンバーを代表するならファフロウ姉妹だし、『達』と表現するのが普通だろう。

問いに対し、ロゼットが重々しく頷く。

「まずは二人の話を聞こう。此処でやきもきしてても仕方ないよ」
空気が重くなる前に先手を打つ。実際、『二人だけが帰還した』という情報だけで、憶測で可能性を挙げるのは建設的ではない。
「そうね。談話室のメンバーも呼んだ方がいいんじゃない？」
「そう思って、二人には談話室に向かってもらってる」
冷静なカナコの対応に内心で感謝しつつ、ロゼットは答えた。
「なら移動しましょう。ツバキ、悪い方に考えては駄目よ？」
「カナコさん……はい、そうですよね」
カナコに促され、ツバキは彼女と共に執務室を後にした。いつも通りの澄まし顔を浮かべたつもりだろうが、明らかに無理をしているようにロゼットの目には映った。

●　●　●

クラウが娘に連れられた先は給湯室だった。
無人の其処で、娘はまず薬缶を火にかけ、その間にコーヒーを淹れる準備をする。
コーヒーの淹れ方にも色々とあるが、彼女が準備したのは一般家庭でよく見られるハンドドリップ方式だった。ポットの上にドリッパーを置き、お湯を注ぐあれだ。
お湯が沸いた事を薬缶が告げると、娘は焜炉の火を止め、ドリッパーに熱湯を注ぐ。
何も難しい作業ではない。だが、普段からやり慣れているかどうかの差は大きい。テキパキという表現は似合わないが、淡々とこなしていく様を見て、クラウは娘の手際の良さに感心した。
（良い香り――）
ドリッパーにセットされたフィルター内のコーヒー粉にお湯が注がれ、香りがほんのりと漂い、クラウの鼻腔をくすぐる。気持ちが落ち着く香りだ。
「良い香りだろう？」
「うん、とっても」
「我のお気に入りだ。やはりコーヒーはこの銘柄に限る」
クラウの反応に気を良くしたのか、娘――アニスの声は、やや弾んでいるように感じた。
『アニス』――それが彼女の名乗った名前だ。
彼女曰く、敬称も敬語も不要らしい。ファミリーネームや年齢も気にはなったが、なんとなく訊くのが躊躇われるというか、訊いても答えてくれない気がした。
蒸らし時間が終わったらしく、アニスはお湯を更に注いでいく。フィルターから抽出さ

れた半透明の茶色い液体がポットに溜まっていくのを眺めながら、クラウはアニスに言われた言葉の意味を思い返す。

――『地球に帰りたいか？』

こうも言われた。

――『帰って――逢いたい者がおるのだろう？』

意図せず来たのだ。元いた場所に帰りたいと思うのは当然だろう。

そして、帰る場所があるのなら、待っていてくれる者がいるのもまた当然だと思う。

アニスの言った事は、どちらも極当たり前の発想から出た言葉で、しかしクラウにはそう思えなかった。クラウの事情を知っていて、その上で出た言葉に思えてならなかったのだ。

「今の――地球での暮らしは幸せか？」

こちらに背を向けたまま、天気の話でもするような口調でアニスが問うた。何を考えているのか、見透かされている気がした。

「多分、幸せなんだと思う」

一般的な水準の生活が送れて、両親が優しくて、親友と呼べる友達がいて、学校も楽しい。自分の容姿に対するコンプレックスこそあれど、他人からすれば贅沢な悩みで、他に不満らしい不満は見当たらない。人間を幸か不幸かに分けるなら、自分は幸せな部類に入るだろう。

「想う相手に、同じように想われる事がなくとも――か？」

アニスの言葉が胸に刺さる。

やはり彼女は知っているのだ。

「近くにいられても、決して添い遂げる事は出来ない。それはむしろ残酷ではないか？」

「……」

ハンにとって、クラウは歳の離れた妹のような認識のはずだ。この一年間だけの事だが、今は教師と生徒という立場で、より一層、異性という見方はされなくなっていると思う。

なにより――彼に恋人の影がちらつき始めた。

彼女は大学の後輩で、クラウにとっては恋敵であるが、それ以上に……。

（……違う。それは責任転嫁だ）

彼女に対する嫉妬が、クラウを狂気に走らせた。〈カタストロ〉によって意識を奪われた上での行為だったとしても、それを望んでいなかったと否定はしきれない。

彼女を消せば、ハンを奪われる事はない。

そういう気持ちがあったからこそ、〈カタストロ〉に身を委ねてしまったのかもしれない。だから、犯した罪を彼女のせいにする事は出来ない。

「……それでも、いい」

「なぜだ？　奪ってでも自分のものにしたくはないのか？」

そうだ。そう思ってしまったからこそ、彼女を傷付け、無関係の人々を傷付け、親友を手にかけてしまった。

「しょせん、人の世も弱肉強食。奪い奪われるのが理だ。優しい者は損をするばかりだぞ」

アニスは平淡な口調で続けた。それは強者の意見だが、クラウにはむしろ、虐げられた経験から出た言葉に聞こえた。

強者だからこそ、弱者に恐れられ、迫害に遭う。そんな例は枚挙に暇がない。

人間は弱者が大多数で、どれだけ強くても数の前に個人は無力だ。

「それでも私は、二度とあんな事はしたくない」

傷付けるくらいなら、自分が傷付く方がいい。

「今のままでも充分だから」

ハンに恋人が出来て、結婚したとしても、親戚という立場でならずっと近くにいられる。妹でもいい。それで、ずっと一緒にいられるのなら……。

「……すまなかった」

謝罪の言葉と共に、クラウは頬に触れる感触に気付いた。アニスの指が、頬を伝う水滴を拭ってくれていた。

クラウは――涙をこぼしていた。

「泣かせるつもりではなかった。そこまで思いつめていたとは……どんな姿になっても、難儀なのは変わらぬか」

アニスの言っている事がよく判らない。それなのに、疑問に思わない。彼女の言っている事を、深いところで無意識に理解しているような、不思議な感覚だ。

「だが、これだけは言っておく。今の汝はクラウ・P・ブランという存在だ。他の世界でどうであれ、汝には汝の幸せがある。それを見つけろ」

ロゼットもそれを望んでおるだろうよ――そう付け加えて、アニスはまた背を向けた。

「う、うん……」

やはりアニスの言っている事は、なんとなくでしか判らない。それでも、クラウのために言ってくれている事は判る。そして、彼女の言うロゼットというのが、クラウの知る女性とは別人を指している事も、やはりなんとなくだが理解していた。

それはこの〈L．C．ファクトリー〉の創始者であるロゼット・コダールで、アニスは彼女と面識があって――

（……まさかね）

今のロゼットが何代目かは知らないが、かなりの代替わりをしているはずなので、創始者は大昔に亡くなっているはずだ。仮にアニスが三十代だと仮定しても、面識はないだろう。なにより、会った事もない創始者が、クラウの幸せを望んだりはすまい。

「さて――そろそろいいだろう」

コーヒーの抽出が終わったらしく、アニスはポットに溜まったコーヒーを保温用の別のポットに移すと、人数分のマグカップを載せたトレイをクラウに預けた。もう話は終わりらしい。

「あの、さっきの話をするために私を……？」

「そうだ。気になってしまったものでな」

泣かせてしまった事を気に病んでいるのかもしれない。心なしか、アニスの態度が柔らかくなったというか、取っつきにくさが軽減された気がした。

「……老婆心のようなものだ。そう気にせずともよい」

そう言って給湯室を後にするアニスを、クラウは慌てて追った。

●　●　●

アイナ・ボーグマンは〈機獣少女〉である。

それも〈獅子王〉の二つ名で呼ばれ、有事の際の独自裁量が認められているほどの実力者だ。

蒼いショートヘアがよく似合う、可愛らしい少女で、小柄な体躯と幼い容姿から、ぱっと見は中学生くらいに思われがちだが、実際には十八歳だったりする。

「……んっ」

アイナが身動ぐ。

どうやら眠っていたらしい。柔らかい何かに抱きかかえられ、適度な揺れは揺り籠のような心地良さがある。このまま微睡んでいたい誘惑に抗いながら、ゆっくりと瞼を開く。

アイナの黄色の瞳に最初に映ったのは――友人にして戦友の少女だった。
彼女の名前はルイゼ・ルンシュテッド。
〈竜帝〉の二つ名で呼ばれ、アイナと同じく、有事の際の独自裁量が認められた〈機獣少女〉である。
緩く波打つ紅いロングヘア。見る者を魅了する、切れ長で桃色の瞳。女性としては長身で、豊満な体形。まだ十八歳とは思えない妖艶な美少女で、ファンの多くからは『お姉様』の愛称で親しまれている。
なるほど、彼女に抱きかかえられていれば、さぞかし柔らかくいやそうじゃなくて――
「……おい、ルイゼ」
「あら、ようやくお目覚めですわね」
「これはどういう状況だ」
「ロゼさんとヴィオレさんにオオミヤ・シティまで送っていただいたのですが、到着してもアイナが起きないものだから仕方なく――ええ、本当に仕方なく、あくまで緊急措置として、こうして運んできた次第ですわ」
カナコ・T・シングウジの要請で、同行者として封鎖区域――関係者の間では〈エリアD〉と呼ばれているらしい――に向かい、大量の蠍の化物と戦闘になった。命からがら脱出し、命の恩人とも呼べる二人の飛行型〈機獣少女〉に、そのまま空輸を頼んだ事まではアイナも覚えている。
「そうか。礼も言えず、悪い事をしたな」
「その分、ワタクシが感謝しておきましたわ」
ルイゼが言うには、件の飛行型〈機獣少女〉であるロゼとヴィオレは状況報告のため、すぐにオオミヤ・シティにある〈機獣少女〉協会の東方大陸支部に向かったらしい。
「で、だ。まだ私の疑問に答えてもらっていないのだが？」
「？　と仰いますと？」
まるで見当がつかないといった様子で、ルイゼが首を傾げる。とぼけている訳ではないのが余計に腹立たしい。
「なぜお姫様だっこなのだ！？」
そう。それは紛う事なき、伝説とも言われる、あの『お姫様だっこ』だった。
「だってアイナ、こんな時でもないとさせてくれないでしょう？」
「当然だ！　ええい、降ろさんかこの蜥蜴女！？」
「もうすぐ目的地ですし、すでにすれ違う方々に見られていますわ」
ルイゼの言葉で、自分達が〈L．C．ファクトリー〉にいるのだと気付く。受付のある

正面玄関を抜けて此処まで来たのなら、相当数の人間に目撃された事だろう。
「うあぁぁぁ……っ」
頭を抱えて頬を羞恥の色に染めるアイナを、ホクホク顔で見つめるルイゼ。
「うふふ。可愛い子猫ちゃん♪」
「やかましい！　さっさと降ろせ!!」

●
●
●

訪問を告げるノックの音が談話室に響くと、代表してカナコが出迎えた。それが筋だろうと、誰からも異論はなかった。
来訪者は予想通りの顔ぶれで、カナコが封鎖区域への同行を要請した、二人の〈機獣少女〉だった。
蒼いショートヘアの、幼い容姿でありながら大人びた雰囲気を纏っているのがアイナ・ボーグマン。
紅いロングヘアの、豊満かつ妖艶な雰囲気を漂わせているのがルイゼ・ルンシュテッド。
この二人が同い年の十八歳というのも驚きだが、更に驚くべきは、どちらも真逆の意味で十八歳には見えないという点だろう。足して二つに分ければ良いバランスになりそうだが、無論、不可能だ。
「まずは――おかえりなさい。無事でなによりだわ」
外傷はないようだが、微妙に消耗の色が窺える二人を見て、カナコはそう告げた。特にルイゼの方は頬が腫れており、まるで両側から激しく抓られでもしたかのような跡が見える。
「大変だったみたいね」
「いえ、これも勲章ですわ」
頬の腫れの事を言われたのだと気付き、ルイゼはそう言って嘯いてみせた。アイナの「自業自得だがな」という呟きが気になったが、状況を鑑みて追究はしないでおいた。
「さっそくで悪いけど、報告を聞かせてもらえる？」
「無論だ。そのために飛んで帰ってきたのだからな」
「上手い事を言いますわね、アイナ」
「？　どういう意味？」
「ルイゼ、茶化すな」
「失礼。では、順を追ってお話ししましょう」

柔らかな笑みを浮かべていたルイゼが、切り替えるように真剣な表情になり、オオミヤ・シティを出てからの一部始終を語った。

キリエ・ソウマの密航。

封印施設の外周部における、機械を思わせる蠍の群れとの遭遇。

その直前、ベアトリーチェとタオエン、そしてキリエが、地下の空洞へと消え、消息不明となった。

移動手段のトレーラーを逃がすため、アイナとルイゼが蠍と交戦し、偶然上空を飛行していた二人の〈機獣少女〉によって九死に一生を得た。

彼女等の話をまとめると以上となる。

ルイゼは話し終えると、手前に置かれたコーヒーをブラックのまま口に含み、喉を潤した。普通に飲んでいるだけのはずだが、それでも優雅に見える。ちなみに、アイナは基本的に補足をする程度で、彼女が話している間にブラックのコーヒーを一口含み不味そうな顔をし、すぐに砂糖とミルクを加えていたのを、カナコは視界の端で捉えていた。

それはともかく――

「まあ、ソウマの馬鹿はいいとして」

「カナコさん……」

窘めるツバキだが、苦笑を浮かべているあたり、カナコが本気で言っている訳ではないと判っているのだろう。キリエは〈機獣少女〉で、カナコに対して普段から並々ならぬ対抗心を燃やしていた。カナコはそれを鬱陶しく思っており、それがまたキリエの神経を逆撫でするという悪循環が続いている。

「そう簡単に死ぬような奴じゃない。心配するだけ無駄だわ」

それでも無関心という訳ではない。人格はともかく、キリエの〈機獣少女〉としての実力はカナコも認めているのだ。

「ベアトリーチェはともかく、タオエンは心配ね」

「タオエンさんの戦闘技能を見る機会は、一度もありませんでしたからね……」

妹のベアトリーチェとは模擬戦をした事がある。〈機獣少女〉とはまるで違う技術体系だが、同等以上の戦闘能力を有していた。大抵の困難には対応出来るだろう。問題は姉の方で、ツバキも彼女が戦う姿は見た事がないという話だった。ベアトリーチェと違い、もしもタオエンに身を護る術がなければ、捜索は急を要する。

「ちなみに、二人が交戦した蠍っていうのはこれ？」

ロゼットが談話室のモニターに映したのは、先に執務室で観た映像だ。ツバキのＭＢデバイス〈カグツチ〉に記録された映像で、カナコが機械の蠍を薙ぎ倒していく光景が記録

されている。
「ああ、同じものだな」
映像を観たアイナが頷き、ルイゼも同意を示す。
「ですわね。これは？」
ルイゼの問いに、ツバキが数時間前に繁華街で起きた事件を説明する。突如大通りを縦断した光線。その直後に、地面から湧くように現れた、機械のような蠍の群れ。それによって、かなりの被害が出たと。
「光線……それは封鎖区域の方からではなかったか？」
アイナが思いついたように訊ねた。彼女の問いに、ルイゼもはっとした表情を浮かべた。
「え？　あ、はい……恐らく、その方角からではないかと」
記憶を思い出すように間を置き、ツバキは答えた。突然の事だったが、大通りの位置を思い出せば、光線が発射されたであろうおおまかな方角は判る。なので、その場にいた者として、カナコも同意見である事を告げた。
「何か気になる事があるの？」
「ワタクシ達が離脱した直後、封印施設から砲撃を受けました。ツバキさんのお話を聞いて、繁華街を襲った光線と同一のものではないかと思いまして」
「封印施設に武装はないはずだけど……」
この場で唯一、封印施設に関する情報を持つロゼットが困惑気味に言う。
「私も発射される瞬間を見た訳ではないが、印象としては、内側から施設の壁を突き破ってきたイメージだな」
「同感です。施設自体に武装がないのであれば、封印されているという機獣の攻撃だと考えるのが妥当ですけれど」
アイナとルイゼには、封鎖区域に向かってもらう必要上、其処に封印施設がある事と、何が封印してあるかも話してある。機獣という、記録が失われた今や伝説の類とされている存在であれば、あの大規模な砲撃も可能だと考えるのだろう。
「うーん……だとしても、機獣が目覚めたのなら封印システムが自動的に起動するはずなんだよね。真っ先にバリアを展開して、施設外に出られないようにする仕掛けなんだけど」
「ワタクシに実装された荷電粒子砲の、何十倍という威力でも破れないものなんですか？」
解析不能となっていた荷電粒子砲の技術だったが、それはクラウが使うMBデバイス〈ラインハイト〉によって現代に蘇った。とはいえ、それは特定の機獣のコアを用いたMBジャケットでしか実装出来ず、ルイゼのMBデバイス〈ジービー〉は、その第一号となったらしい。

「理論上はね。ひょっとしてルイゼ、荷電粒子砲――使ったの？」
暴走したクラウとの戦闘で見ているので、荷電粒子砲の威力はカナコも知っている。理論上とはいえ、その何十倍という威力でも防げるらしい封印施設のシステムも驚きだが、ロゼットはそれよりも、ルイゼが実際に荷電粒子砲を使った事に驚いたようだ。
「出来れば使うなとの事でしたが、そうも言っていられない状況でしたので」
「そっか。あとでちゃんとチェックしないとだね」
事もなげに言ってのけるルイゼも豪胆だが、ロゼットはロゼットで不具合を起こす心配はしていなかったのだろう。肝が据わっているという意味では、どちらも良い勝負だ。
「話を戻すが――現に施設内からの攻撃は施設外に及んだ。これはバリアが破られたという事ではないのか？」
「あくまで理論上での事だし、驕るつもりもないけど、あのバリアを破るのは不可能だと思うんだよね。例えば、団扇でぱたぱた扇いで、火事を消せる？」
「そのレベルでありえないという事か」
専門知識を持たない人間でも判るロゼットの例えに、アイナはすんなりと納得した。彼女に対する技術者としての信頼故だろう。本人の容姿と人柄を知っていると忘れがちだが、彼女はロゼット・コダールを襲名した稀代の技術者なのだ。

「――なら、そもそも封印システム自体が起動してないんじゃないか？」

そう言ったのは、この場にいる唯一の男性である橘アサトだった。
ロゼットの仕事に間違いはない。機獣が目覚めたのなら、システムは正常に起動する。そういった先入観が、無意識にその可能性を除外していた。
だが、アサトは惑星ゼヘナの住人ではない。ロゼット・コダールという名前の重さを知らないからこその発想だ。
「アサト君、私の仕事を疑うんだ。それは人間のやる事だから、絶対はないけど――」
「いや、そうじゃなくて」
拗ねた口調になるロゼットを、アサトはやや焦って遮る。
「誰かが封印システムを壊すなりして、それで起動しなかったんじゃないかと」
彼の発言に、場が沈黙する。
「……なんか、まずい事言ったか？」
アサトの問いに、同じく地球からの来訪者である流遠やみひめとクラウ・P・ブランは、判らないといった表情を浮かべている。

やみひめはひどい取り乱しようだったとロゼットから聞いていたが、談話室で顔を合わせた際には、そんな様子は微塵(みじん)も感じられなかった。アサトが無事に帰ってきたからなのだろうが、カナコとしては妙に複雑な感情が彼女に対してはある。

それはともかく――

封鎖区域への侵入は禁忌(タブー)。

法で禁止されずとも、本能に刻まれているかのように、誰もそれを犯そうとはしない。まして、其処(そこ)に置かれた施設内に侵入し、破壊行為をする者などいるはずがないのだ。

ゼヘナの人間であれば。

「封鎖区域は特別な場所で、ゼヘナの人間であれば、そういう発想はまず出てこないんです。だから驚いてしまって……お気を悪くされないでください」

「そうなのか？」

ツバキが申し訳なさそうに、自分達の反応(リアクション)の理由を説明する。アサトは特に気を悪くした様子はないが、彼女にこう言われて溜飲(りゅういん)が下がらない者は、そうそういないだろう。

「神社やお墓で悪戯(いたずら)をしないようなものかな？」

「うん。きっと、一種の聖域みたいな認識なんだと思う。罰(ばち)が当たるみたいな」

やみひめとクラウのイメージは、当たらずとも遠からずだが、それはそういう認識の元に染み付いた風習に近い。対して、ゼヘナの人間は生まれながらに、封鎖区域への忌避感がある――らしい。

実を言うとカナコには、それがない。周囲がそういう認識なので、そういうものなのだと同調していただけで、こうして目の前に禁忌(タブー)だと感じない者が現れれば、自分の感じ方が間違っていなかったのだと思える。

（私は、本当にゼヘナの人間じゃないのかもしれない。じゃあ、やっぱり橘(たちばな)さんは私の……？）

兄――かもしれない。

そう思う度(たび)、つい彼を視線で追ってしまう。

すると――

「……そうか。うん、そう考えれば納得がいく」

口元を隠すように手のひらを当て、黙考していたロゼットが呟(つぶや)く。

「民間レベルの防犯設備(セキュリティ)だけで、壊してしまえば簡単に入れる。対人迎撃システムなんてないし、警備員もいないから、ある程度の用意があれば、封印システムの無効化は私一人でも出来てしまう――」

ロゼットの言葉に、怠慢だと罵声を浴びせられる者はゼヘナにはいないはずだ。封鎖区域へ立ち入ろうなどと考えないのが普通である以上、重要施設であっても過剰な防犯設備は無駄でしかない。

だとすれば、それをやったのは封鎖区域に対する禁忌がなく、封印施設に眠る機獣の存在を知っている者。

すなわち――

（橘さん達とは別の来訪者……？）

此処にいない人間であればファフロウ姉妹。もしくは、まったく接点のない第三者が存在する事になる。どちらも考えたくはないが、せめて前者ではあってほしくないとカナコは思った。

「――話の途中にすまない。ロゼット、テレビの報道番組を」

不意に言葉を発したのは、ロゼットの秘書らしき娘だった。たしか名前はアニスだったか。クラウと共に談話室に向かう途中で合流し、給仕を済ませた後は気配を消したように黙して語らず、今まで完全にその存在を忘れていた。まるで精緻な彫像のように景色に溶けこみ、壁の花であったなら、誰にも声をかけられる事はないだろう。

誰もがカナコと同様にきょとんとし、慣れているのか、ロゼットだけが不思議に思いながらも、言われた通りにモニターのチャンネルを切り替えた。

「……映画か？」

誰もが押し黙る中、アサトが半信半疑といった口調で言った。その場の誰もが、彼の言う通りであってほしいと、無意識に願っただろう。だが違う。テレビのモニターに映る、巨大な機械のような蠍が荒野を進む映像は、現実に撮影されたものだった。

●　●　●

巨大な蠍が荒野を進んでいる。

のっぺりとした平らな胴体から、左右に伸びる四対の節足を忙しなく動かしながら前進している。しかし、忙しない節足の動きに反して、進行はそれほど早くはない。せいぜい時速六十キロメートル。普通自動車レベルだろう。だが、全長百メートルの巨体が普通自動車並みの速さで進む光景は、見る者に圧倒的な恐怖を与える。

自分達を脅かす巨大な脅威が確実に迫ってくる――それは原始的な恐れだ。

「――――」

巨大な蠍の頭部内。無数の光がぼんやりと灯る其処は、ある種の操縦室に見える。中央に座席があり、左右の肘掛けに相当する位置には、操縦桿らしきものもある。

しかし、静かな吐息が聞こえるものの、操縦者らしき者は見当たらない。

「……ん」

いや、いた。

座席の後部にある、恐らくは荷物を置くための空間に、猫のように身を丸めて眠る娘が一人。

高校生くらいの、控えめに言っても綺麗な少女だ。だが、それ以上に見た目が強烈である。ゴシックロリータを思わせる黒いドレス。適当に切ったであろう、不揃いな長さの黒髪。前髪に隠れているが、右目は眼帯に覆われている。

その手のパーティ――いや、夜会にでも向かう途中だと言われれば納得するが、こんな非常識な南瓜の馬車はないだろう。

「――――」

寝返りを打った少女は一瞬、閉じられていた黒い瞳を覗かせたが、またすぐに微睡みの底に沈んでいった。

体内に黒衣の眠り姫を抱き、巨大な蠍は荒野を進んでいく。

その先には――

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十九話をお届け致します。

人間とは怠（なま）け者です。僕は特にそうですが、それが人間の本質です。あくまで強い意志で自分を戒めているだけで、誰だって必要がなければ怠けます。

はい。今回はなぜか壊滅的に集中力が働かず、推敲が終わったのは十四日という有様でした。公約はしていませんが、定期更新日の前日です。鋼の意志が欲しい……。

少しくらいは本編の話も。引っ張る形になりましたが、ようやく封印されていた機獣が姿を見せました。『ゾイド』で『シュウエンノシシャ』で『蠍（さそり）』というキーワードから、ご存じの方は予想されてると思いますが――アイツです。ちらっと登場した少女については、また次回。

それでは謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝――というか、いっそ謝罪を。原稿が遅れに遅れ、しかもお忙しい時期に、申し訳ありませんでした……。

アニスちゃんの元ネタ、アニマウルペスについては『追加兵装』をチェックだ！

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ついてきくださっているでしょうか？　判らない部分は指摘してやってください。

次回は多分、バトります。多分……！

２０１７／11／18　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX　第2部』小説ページに戻る